



ぼ う は ん 手 帳

10年という月日は、あつという間
のようでもあり、とても長かったよ
うにも感じます。この10年間で、
何より大きく変化したのは、情報の
受信・発信にかかわる日常生活の
風景ではないかと思えます。

携帯電話の主流はいわゆる「ガ
ラケー」からスマートフォンに変わ
りました。さまざまなアプリケーション
の利用によって、高度かつ多様な情
報を一般市民が手作りできるよう
になりました。また情報発信のイン
フラも、個人ごとに分断されたプロ
グから、拡散性の高いツイッターや重
層的にネットワーケ化されたフェイ
スブックなどに進化し、利用者は子
どもからお年寄りまで、飛躍的に
増加しています。

かつては編集・印刷・輸送能力を
持つ新聞社や出版社、撮影・録音・

電波発信能力を持つテレビ局やラジ
オ局といった、いわゆるマスコミだけ
が独占していた「情報発信」の営み
を、個々の市民が自由に楽しみ始め
たことは、社会の大きな進歩である
と感じます。

しかし、コインに両面があるよう
に、この進歩は、情報の氾濫と信頼
低下という悪影響をも、私たちに
もたらしました。「とくに根拠のな
い不安」のようなものが社会の底辺
をひたひたと満たしつつあります。
まるで自覚症状なく人の心身を蝕
む「ストレス」のようです。

この見えない暗雲の中、人々の生
活を安心、安全、安定の航路へと導
く「灯台の輝き」となることこそ、
今日の新聞の使命であると確信し
ます。環境激変の10年間に確固と
して変わらなかったのは、情報源と
しての新聞紙面への信頼感と、それ
を毎日確実にご家庭まで届ける戸
別配達制度への信頼感です。

全国読売防犯協力会は、その信
頼感を倍加するための尊い社会貢
献であり、YCスタッフのモチベー
ションアップにもつながります。

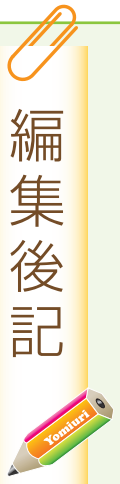
全国のYCの皆様が10年間、地域の防
犯拠点としてたゆまぬ努力を続け
てこられたことを、発足のお手伝
いをした一人として心から誇りに思
います。



読売不動産株式会社
取締役
総務・コンプライアンス担当

岩崎 智彌

2001年から2010年まで
読売新聞東京本社販売
局販売企画調査部に勤務
(2006年より同部部長)。
Y防協の設立・運営に大き
く貢献した。



編集後記



読売新聞東京本社
販売局販売企画調査部

部長 原田 康久

教科書でおなじみの童話『ごんぎつ
ね』の作者新美南吉は、昨年が生誕10
0年だったことから再評価された感が
あります。『ごんぎつね』は切なく、味わ
い深い作品でしたが、新美の作品では
『花のき村と盗人たち』という忘れがた
い名作があります。

平和な村へやってきた盗人の親方。4
人の弟子に村を内偵させ、自分は数
陰でたばこをプカプカ。すると子牛を
連れた一人の童が近づき、親方に子牛
を預けると、遊びに行ってしまう。
ただそれだけのことなのに、今までさん
ざん人々から忌み嫌われてきた親方は
清い心を取り戻し、弟子に盗人稼業を
やめさせ、自分の悪事を役人にすつかり
白状するのです。

相互理解をテーマに秀作を多く書い
た新美らしい作品ですが、残念ながら
現実社会では、この親方のように窃盗
犯は簡単に改心してくれません。

2013年の『犯罪白書』にやると、刑

法犯の認知件数は、2002年をピーク
に減少し続けているというものの、10
0万件を超える数にのぼります。特に
再犯者率が1997年から一貫して上
昇し続けていると白書は警告していま
す。「改心」を促すのは、難しいことな
でしょう。

もっとも、10年におよぶ全国読売防犯
協力会の活動が、少しは刑法犯減少の
お役に立ったかもしれないと思つと、誇
らしい気にもなります。やはり、犯罪を
未然に防ぐこと、犯行を行いたくない町
づくりをすることが重要になってくる
と思えます。

町の隅々まで新聞販売店のスタッフ
は熟知し、巡回しています。人々の暮ら
しの中に分け入って商いを行う「御用聞
き」の仕事も、全国規模で展開してい
るのもはや新聞販売店だけではないで
しょうか。個人主義、プライバシー重視
ばかりはびこる世相で、奇跡的に残った
このインフラを、防犯、さらには防災に
役立てることが私たちの願いです。

盗賊の親方をすつかり改心させ、村を
守った童の正体について、新美はこう結
んでいきます。「けつきよくわからなくて、
ついには、こういふことにきまりまし
た、――それは、土橋のたもとにむかし
からある小さい地藏さんだろっ」。

我々も町と暮らしを優しく見守り、
いざという時に人々を救つ、このお地
蔵さんのような存在でありたいと強く
願います。